

国史跡 頭塔発掘調査現地説明会資料

1989年4月15日

史跡 頭塔環境整備委員会  
巽 湾一 郎

1 はじめに

頭塔は奈良市高畑町字頭塔921番地に所在する方錘状の土壇を指し、土壇の各面に奈良時代の石仏数基が古くから顔をのぞかせていた。遺跡は国の史跡に、石仏は国の重要文化財に指定されている。

頭塔の名称は、古く平安時代末にまでさかのぼり、奈良時代の留学僧で、帰国後吉備真備とともに橘諸兄政権のブレーンとして活躍した玄昉の首を埋めた首塚に由来すると言う（文献3）。この二人と政敵であった藤原広嗣が、二人の排除を大義名分に乱をおこしたことは有名であるが、乱の平定後、筑紫観世音寺に左遷されていた玄昉が、広嗣の悪霊にとらわれ、五体ばらばらにされ都の各所に落ち、その首を埋めたのがこの頭塔であると伝えられる。この伝承は以来ずっと江戸時代まで語り継がれてきた（文献4・5）。

2 これまでの研究

大正5年、奈良県の佐藤小吉による調査、昭和2年、内務省の上田三平の調査の成果が公にされると、美術史家をはじめとする多くの研究者の注目を集め、数多くの論文が発表された。中でも、板橋倫行、福山敏男による頭塔に関する新しい文献の発見と考察は、頭塔の性格・造立年代を確定したと言っても過言ではない（文献1・2）。

すなわち、頭塔は墳墓ではなく、寺の木造の塔と同様に、釈迦の舍利を納めるストゥーパであり、神護景雲元年（767）、東大寺の権別当実忠によって造立されたものというのが、以後通説となった。その後も様々な視点から貴重な論が展開されているが、実地踏査と測量を基に頭塔の構造を初めて復原した石田茂作の研究が注目される。

次に、四面の上下各所に配された石仏の研究は、前述の佐藤小吉や西村貞に負うところが多い。若干異論をとらえる人もいるが、各面最下段の石仏が中心とな

り、四方仏土（南－釈迦如来土、東－薬師如来土、北－弥勒如来土、西－阿弥陀如来土）を表わし、各面上段の石仏はその分身仏と解され、他に釈迦の一生をモチーフとするような石仏も配されている、というのが大方の認めるところとなっている。

3 発掘調査の経過

前述した先学達も現地踏査の際、部分的な発掘を行い、石仏・石積・石敷等を検出しているが、本格的な発掘調査は、1974年、東に隣接する飛火野荘建設に際し、頭塔の範囲確認を目的に、東の一部を発掘したのが初めてである。この調査で、基壇と第1段の石積及び石仏を検出し、頭塔の構造の一端が明かとなった。その後1987年、奈良県が整備復原事業に先立つ調査に際して、東北の四分の一を発掘し、本来の頭塔の構造・規模・時期変遷に関して貴重な成果をあげた。今回の調査もその一環で、1989年2月13日に開始し、現在も継続中である。今回7段上面中央にある五輪塔の下の調査を行ない、心柱の痕跡を検出した。頭塔の構造や性格を考えるにあたって、極めて重要な発見といえよう。以下、従前の調査の成果も含め、頭塔の構造について記す。

4 頭塔の構造

断ち割り調査を行っていないので、断言できないが、まず地山に心礎を据え、基壇を築きながら心柱を立てる。基壇は厚さ30cm程度の盛土と版築を交互に繰り返して築成し、周囲を石積化粧する。基壇規模は一辺約32.0m、高さ約1.2m。基壇上面の化粧は、層位的に2回の造り替えが認められ、I期のそれは、やや大きめの礫石を犬走り状に配し、その外側に一段下げて拳大の玉石を幅約20cmにわたって敷きつめる。II期のそれは、I期の基壇面を黄褐土で埋め立て、上面に細かいバラスを敷く。III期のそれは、II期のそれを更に黄褐粘質土、黄灰砂質土で版築状に築き上げ、表面には化粧を施さない。II期面とIII期面の比高は、深いところでは60cm以上もある。II期基壇上面には、瓦や石が崩れ落ちた状態で検出され、またIII期の盛土にも多量の瓦や転落石を含む。第1段の石積は、III期基壇面に積まれ、またI・II期の化粧は、この石積の内側にもぐっていく。さらにI期基壇化粧とIII期の石積は、方向を違えており、後に積み替えられたのは明らかである。

1段以上についても、石の積み替えの可能性もあるが、2段以上の方位は、1段石積ほど、1期の基壇化粧の方位と変わらないので、1段のみの積み替えと考えている。正確な図面作成と断ち割り調査を待つて判断を下したい。

さて、基壇築成後、版築によって順次階段状に七段に段築する。基壇崩壊土から和同銭が出土し、各段の各所に金属反応を確認しているのので、段築の際に、西大寺西塔基壇のように銭をばらまく地鎮がおこなわれたのであろう。

次に仮に五重塔とした場合を想定して、築成の工程を復原してみよう。まず、7段の四面中央に各1基の石仏と袖石を据え、袖石の前面にあわせて裏込めしながら石を積む。こうしてできた7段上面に桁を組み、五層目として木造の塔身一層を建て、その上に露盤・伏鉢・九輪を設置する。次に7段石積に桁をかけ、隅木・垂木を置き屋根を作り、瓦を葺く。次に6段上面に土を下に向かって傾斜をつけながら置き、さらにその上に全面にわたって石を敷きつめる。この際、隅に向かってだんだんと高くし、反りをつける。以下、同様な手順で築いたのである。

頭塔は、このように初層から第四層の塔身は、土と石と瓦で作り、瓦を葺く極めて稀な塔である。類例としては、堺市土塔町に所在し、行基建立と伝わる大野寺旧境内の「土塔」を挙げられるが、これも頭塔と同じ型式の塔であった可能性は極めて高い。ただし、大野の土塔は、石の代わりに埴を用いて13段に築き上げ、瓦を葺いていたといわれるが、石仏は安置されていないようである。

従前の成果によって石仏は各面それぞれ第1段に五体、3段に三体、5段に二体、7段に一体、総数四十四体が配置されていたことは明らかになっている。今回新たにA～Fの六体を検出したが、北面1段目の中央石仏の西及び同3段西寄りの一体は抜き取られていた。また西面の3段北寄り石仏B、同5段北寄り石仏Cには彫刻がみられない。A・Dは独尊坐像で光背状に化仏10個がめぐる。8号石仏と同形の石仏である。Eは後世に上半部を打ち欠かれている。Fは頭塔の石仏のほとんどが如来であるが、これは菩薩が中心となっている石仏である。

次に塔本体と石仏の関係であるが、各面最下段中央の石仏は、四方仏を表わし、釈迦八相や経典に基づく題材の石仏も配されている。このようなあり方は、木造多重塔の初層の内陣の四方に、四方仏や釈迦八相や経典に基づく題材を塑像の群像で表わすのと共通性を持つ。頭塔の場合はそれが塑像でなく石で表わされているのであり、基本的には、塔を構成する重要な要素で塔本体と一体のものである。

## 5 頭塔の変遷

前述した塔は、1期の基壇にともなうことは、1期基壇化粧の東北と西北コーナーに隅木を支えたと考えられる柱穴を検出していることから明らかである。この柱穴は、間隔をおいて軒をまわる可能性もあるが、基壇化粧の下の層から掘り込まれており、以後断ち割りを行なって決着をつける予定である。両コーナーの柱には、根巻き石がともない、西北の場合には根巻き石や柱痕跡周辺に朱の痕跡をとどめ、柱は赤く塗られていたことがわかる。1期の頭塔は、心柱痕跡をとりまくように炭や灰が残り、おそらく落雷の禍にあって廃絶したのであろう。

1期の廃絶後、II期基壇の頭塔の各段にはは、まだ瓦が残り7段上面には相輪に替わって、凝灰岩製の六角屋蓋の十三重石塔が安置される。その根拠は、北面の6段上面の石仏前から、凝灰岩製の六角石塔屋蓋が出土し、また7段上面の心柱の上及び周辺に同じく凝灰岩製の台石と考えられる石材が置かれている事。もう一つは、文献3に「十三重の大墓」とあり、平安末期には、頂部に十三重のなんらかの施設の存在が認められ、それが石塔にふさわしいと考えるからである。奈良時代の六角屋蓋の多重塔は、奈良市田原町の県史跡塔の森の凝灰岩製の十三重石塔と正倉院蔵の三彩七重塔が有名であるが、頭塔出土品はそれらより新しい型式で、平安時代前期頃のものと同定できる。なお、この石塔にともなう舍利は盗掘にあっているが、盗掘穴の埋土から和同開珎・神功開宝・隆平永宝が出土している。平安末期頃に、上段の石仏に土師器小皿が供養され始め、その頃がII期の廃絶時期とみてよかろう。

III期の基壇の頃には、今日見ていただける状況とあまり変わらず、瓦もほとんど下に落ち、各段には凝灰岩製の石塔類が多数安置されていたようである。そして、石仏は一般民衆の信仰の対象となり、13世紀頃まで供養されていたようである。

## 6 出土遺物

基壇版築土より、奈良時代後半の完形の須恵器の壺1点の他、土師器や須恵器の破片が出土しており、基壇築成時期の決定に有力な資料となる。いずれも奈良時代後半のものである。

奈良時代の軒瓦は、前回の調査分を合わせると、約300点出土している。その

## 頭塔に関する文献

- 一、『東大寺別當次第』「神護景雲元年實忠和尚依『僧正命』御寺朱雀之末作『土塔』」
- 二、『東大寺要録』第七「東大寺權別當實忠二十九ヶ條事、…  
一、堤作池一處、東大寺南春日谷、以去神護元年所造也。一、奉造立塔一基、在新樂師寺西野、以崇雲元年所造進也。右二種事承『僧正命』奉爲國家奉造如件。
- 三、『七代寺巡禮私記』興福寺條「走井上築垣下有『小門』、玄昉僧正之墳厠也。興福寺興方五町餘荒野中有十三重大基、以『僧正之頭』埋此基、故号『頭塔』、其基石多彫刻佛菩薩像者也(中略)天平十八年五月廿三日僧正爲大宰少貳藤原廣繼之靈被雷擊也」

四、『今昔物語』十六ノ六「其ノ後廣繼惡黨ト成テ、且ハ公ヲ恨奉リ、且ハ玄昉ヲ恨セムト爲ルニ、彼ノ玄昉ノ前ニ惡靈現レタリ。赤ヤ交ヲ着テ冠シタル者來テ、俄ニ玄昉ヲ攫取テ空ニ昇ス。惡靈其身ヲ散々ニ擱破テ落シタリケレバ、其弟子共有テ拾ヒ集メテ葬シタリケリ…彼ノ玄昉ガ墓ハ千今奈良ニ有トナム語リ傳ニタルトカヤ」

五、『大和志料』「正應ノ間別根ニ頭塔三十九間四尺ト見ニ慈性院當時既ニ在家タリ。頭塔ノ名義詳ナラズ世ニ傳フ天平中僧玄昉藤原廣繼ノ靈ノ爲ニ空中ニ攝マレ、興福寺ニ落ツ。即チ其ノ頭ヲココニ葬リ塔ヲ造ル。因テ頭塔ト名ケタリト。是俗傳ニシテ取ルニ足ラズ。」

大半は東大寺式で、ほかに重圓文軒丸瓦と重郭文軒平瓦が少量出土している。

金属製品には、前述した錢貨のほかに、銅製の環も出土している。石塔類は六角屋蓋のほかに、西面の第2段上面、第4段上面、Ⅲ期基壇上面などから多数出土している。

## 7 おわりに

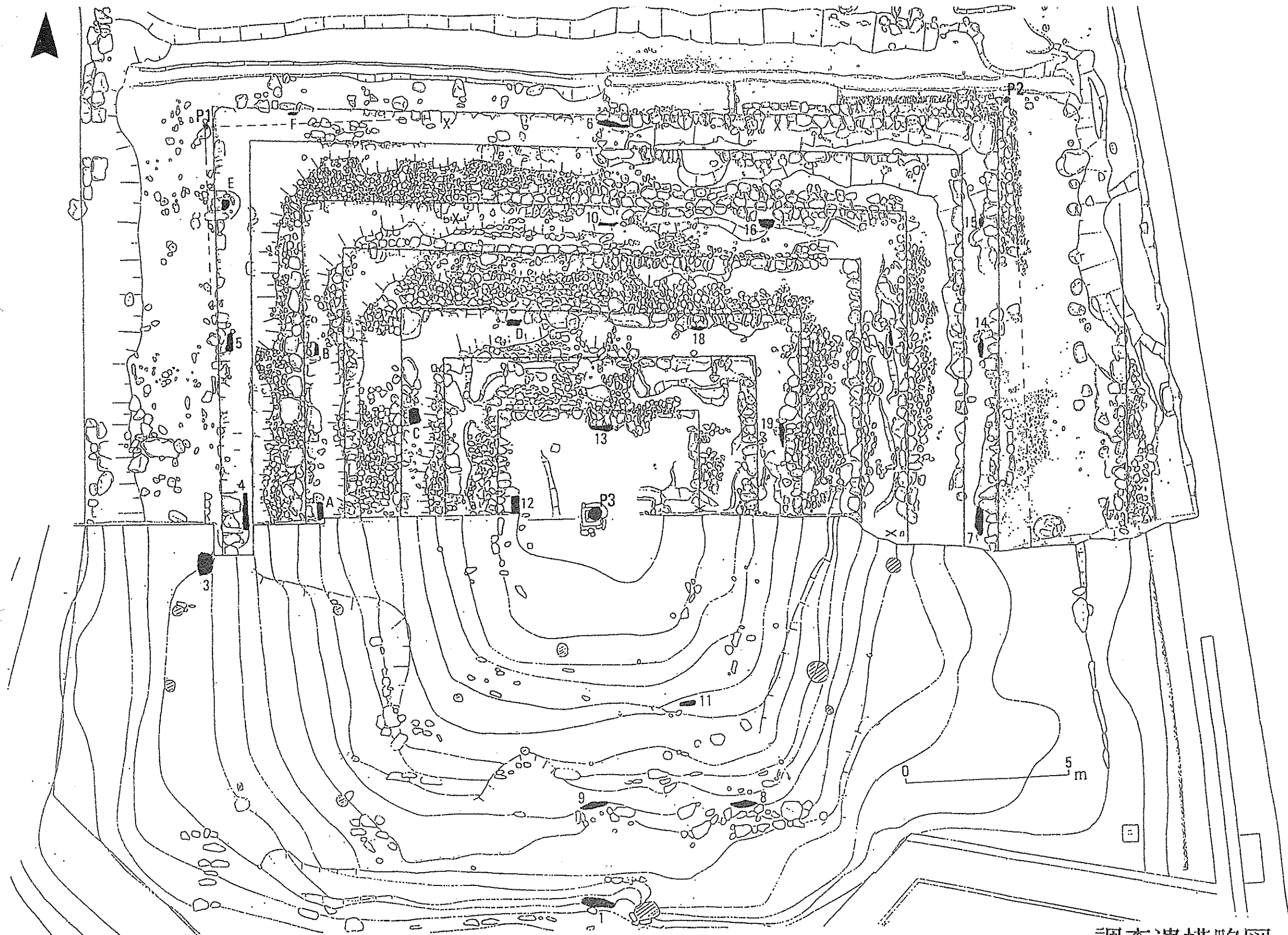
従前の調査とあわせると、頭塔の北半分の調査を終えたことになる。その結果、類稀な構造の塔の姿が浮かび上がったわけである。出土遺物やその年代、文献史料から、8世紀後半の東大寺の僧実忠が築造した「土塔」がまさしくこの塔であったに違いない。委員会では遺構保存のため早急に素屋根をかけ、調査と整備を進める一方で、一般の皆様方にも発掘したままの状態を御覧頂けるような措置を考えている。

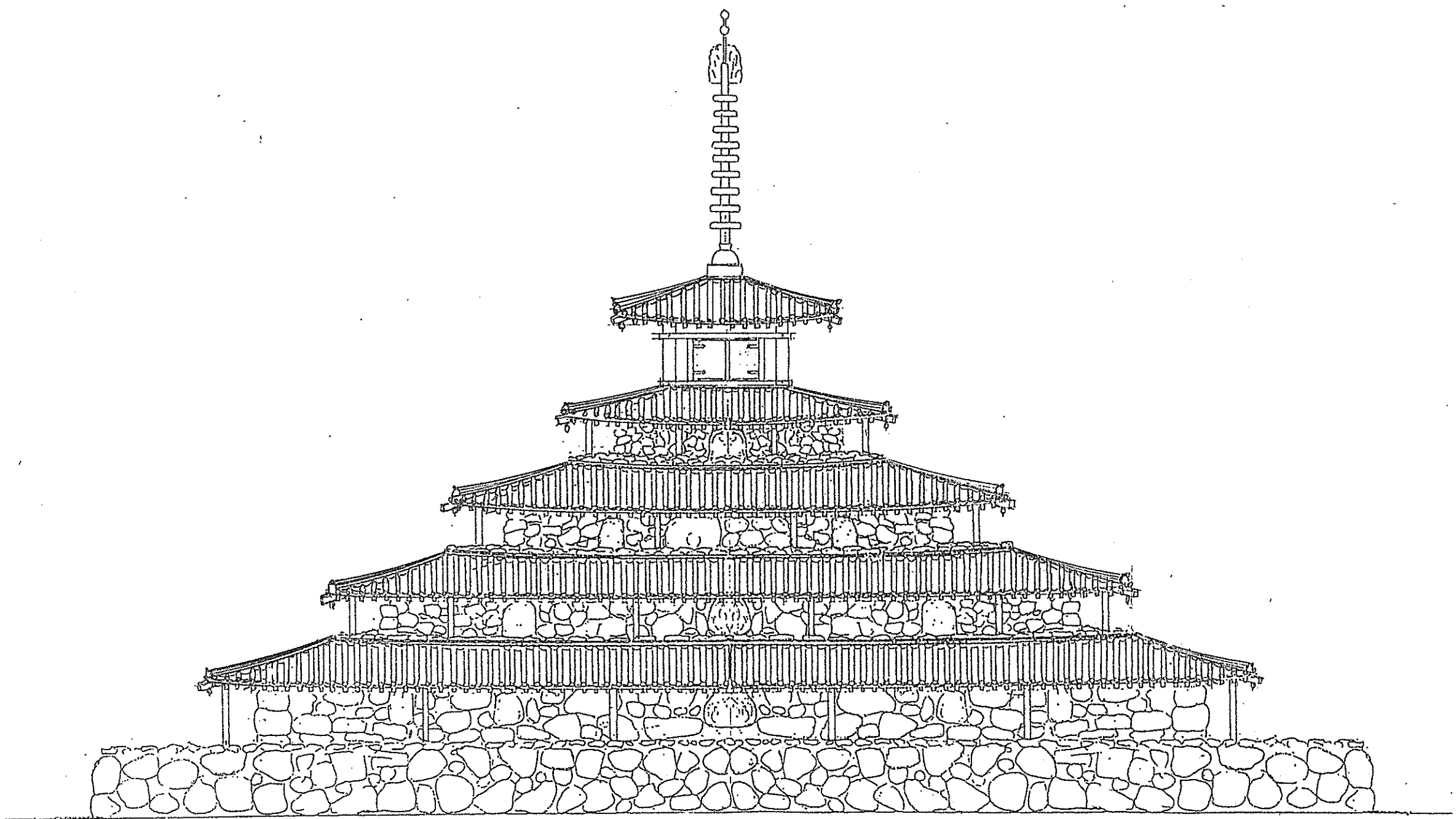
頭塔規模

	長 (m)	巾 (m)	高 (m)
基 壇	32.0		1.2~1.8
1 段石積	24.2		1.1
2 段石積	21.7		1.2
3 段石積	18.6		1.1
4 段石積	15.8		0.5
5 段石積	12.4		0.8
6 段石積	9.6		0.6
7 段石積	6.2		0.9
基 壇		4.0	
1 段石積		1.1	
2 段石積		1.8	
3 段石積		1.1	
4 段石積		1.8	
5 段石積		1.1	
6 段石積		1.8	
7 段石積		6.2	



頭塔の位置図





頭塔復原案

